

事例①（茨城県県南生涯学習センターの研修会）

●研修名：令和2年度 茨城県生涯学習ボランティア活動支援事業

「市町村ボランティアコーディネーター養成研修」

「ヤングボランティア指導者育成研修」

●目的：ボランティアに興味や関心のある県民及びボランティアコーディネーターを始めたい県民を対象に、ボランティアコーディネーターの基礎知識や活動の具体例、ボランティアコーディネーターの必要性や役割について学ぶ機会を提供する。

●主催者：茨城県県南生涯学習センター

●開催日時：令和2年12月6日（日）

10時00分～12時00分

●会場：茨城県県南生涯学習センター
中講座室1

●講義：「“みんな”で考える
コーディネーターの役割」

●講師：全国体験活動ボランティア活動
総合推進センター
コーディネーター 山本 裕一氏

（青山学院大学コミュニティ人間科学部コミュニティ人間科学科 学部特任教授）

●受講対象者・参加人数：市町村や高校のボランティアコーディネーター、将来ボランティア
コーディネーターになろうとする人、ボランティアコーディネーターに
興味・関心のある人 14名



●研修内容 講義「“みんな”で考えるコーディネーターの役割」

最初に、茨城県のボランティアへの取り組みについてから講演が開始した。コーディネーターの役割については、先生が以前勤務していた国立中央青少年交流の家における活動を事例として説明。

- 1 コーディネーターとは
 - ・各部を調整し、全体をまとめること
 - ・もう一つの意味は、「対等にする、同格にする」→“支援”から“協働へ”
- 2 支援から協働へ
 - ・学校支援地域本部事業から地域学校協働本部事業へ
 - ・協働活動では、考えを押し付けるのではなく、双方の当事者の自己決定権を尊重
 - ・コーディネートは、人と人との利害関係を調整するのではなく、人と人との関係を紡いでいく（一人一人の思いを受けて止める）過程を大事にする。人の心や思いに働きかけて新たな価値を創造する営みである。
- 3 地域学校協働活動コーディネーターの心得
 - ・「つなぐ」：先生の「こんな人に来てほしい。」というニーズと、対応する地域人材をイメージし、本人の意思や考えを聞き、実際の授業などの場面で生かされるよう全体を調整する。
 - ・「寄り添う」：地域スタッフや先生の戸惑いや悩み、トラブルに対して相談を受けたりアドバイスを行うなど、相手の立場に立った対応を行う。
 - ・「育てる」：協働活動を円滑に進めるために、教育委員会にも相談し学校の仕組みや子供の実態について学ぶ機会をつくり、スタッフの資質向上と活動継続への意欲を高める。
- 4 地域学校協働活動コーディネーターの実情
 - ・コーディネーターの大半が40代以上であり、60代・70代が45%を占めている

- ・コーディネーターを継続して担う人材がいない、コーディネーターの後継者が育成されていない」という課題への取り組みが必要である。
- 5 青少年教育施設のコーディネーターの取組から
 - ・国立中央青少年交流の家の教育事業富士サマーキャンプのビデオを紹介し、その上でコーディネーターにほしい力を説明
 - ① 新たな価値を創造する力、人、モノをつなげ、調整するとともに、その組み合わせから更なる価値を生む工夫（富士登山は手段であって、登山をとおして何を学ばせるか。）
 - ② あらゆる事態を想定した先見力（個人でできることではない。相談できるスタッフを確保する。）
 - ③ 価値観が異なる者たちの考えを共有させる力（熟議の必要性、思いを吐露できる雰囲気づくり）
 - ④ 青少年教育施設は子供たちへの教育の場であるとともに、学生スタッフも教育の対象であるということ（寄り添う心；配慮力）
- 6 地域福祉コーディネーターの事例から学ぶ
 - ・文京区社会福祉協議会地域福祉コーディネーターの事例を紹介。
 - ・人と人をつなぐそのためには、つながる場づくり、場を作って終わりではなく、持続可能な活動へ、そのためにまた人と人をつないでいく必要がある。

<主な感想等>

- ・ボランティアコーディネーターの現状が大変よく理解できた。
- ・考えていることを整理する良い機会となった。
- ・具体的な事例などを踏まえ話していただきとてもよくわかった。これから考えていかなければならない視点もよく理解できた。
- ・目的、主役を第一に考えていきたい。
- ・コーディネーターの役割としては、色々な発表の中で地域との繋がりや学校側とのコミュニケーションが必要であると感じた。
- ・地域学校協働活動の位置づけがよく分かった。熱意をもって続けていきたい。
- ・地域の担い手を育てるため、学校と協働活動を行うということが、とても分かりやすかった。
- ・なぜ、地域と学校の協働が必要なのか少しずつ分かってきた。
- ・コーディネーターとしての具体的な方法等について、もっとヒントがほしかった。
- ・支援から協働を意識して今後の活動に活かしたい
- ・コーディネーターにほしい力が参考になりました。今後の活動の中で活かせたらと思います。
- ・コーディネーターとしての役目として、「つなぐ」「寄り添う」「育てる」を意識して活動していきたいと思いました。
- ・コーディネーターの力が必要であり、学校、地域との信頼関係が大切である。
- ・ボランティアの高齢化により後継者が不足している現状が理解できた。これからは高校生や大学生などにも活動が広がっていくよう努めます。